



オランダ国際球根協会ニュースレター VOL.008

あっという間の11月でした。IBCでは、10月30日・31日の「JFIトレードフェア2009」(東京・大田市場FAJ)、11月11日～13日の第3回ガーデンEXPO(GARDEX)(IFEX会場内)、東京・お台場フラワーフェスティバルなどに出展し、数多くの皆さんに足を運んでいただきました。ありがとうございます。展示ブースで紹介した「単球植え花芽つき球根」(冷蔵処理した花芽つき促成球根)とそれを使ったプランツアレンジには、数多くの方が興味を持っていただけました。次号のニュースレターでも詳しくご紹介します。



さて、今回のニュースレターはチューリップの話題をあれこれご紹介します。

CONTENTS

- 「フラワーバルブ・オブ・ザ・イヤー2010」はチューリップ「パープルプリンス」に決定
- 新たなチューリップ野生品種発見
- 定番 切り花チューリップ スウェーデンとポーランド事情 Bloembollen Visie から
- 2010年 チューリップ品種テストスタート Vakblad から
- チューリップ エクスカーション： チューリップ視察旅行
- 「人権」もチューリップで オランダの話題 鈴木のリ子さんのブログから
- 切り花チューリップのディスプレイ : IFEXの展示から

CONTENTS

「フラワーバルブ・オブ・ザ・イヤー2010」はチューリップ「パープルプリンス」に決定

<http://www.prod.bulbsonline.org/ibc/jp/professional/inspiration.jsf/Inspiration/technical-information1/Flowerbulb-of-the-year.html>



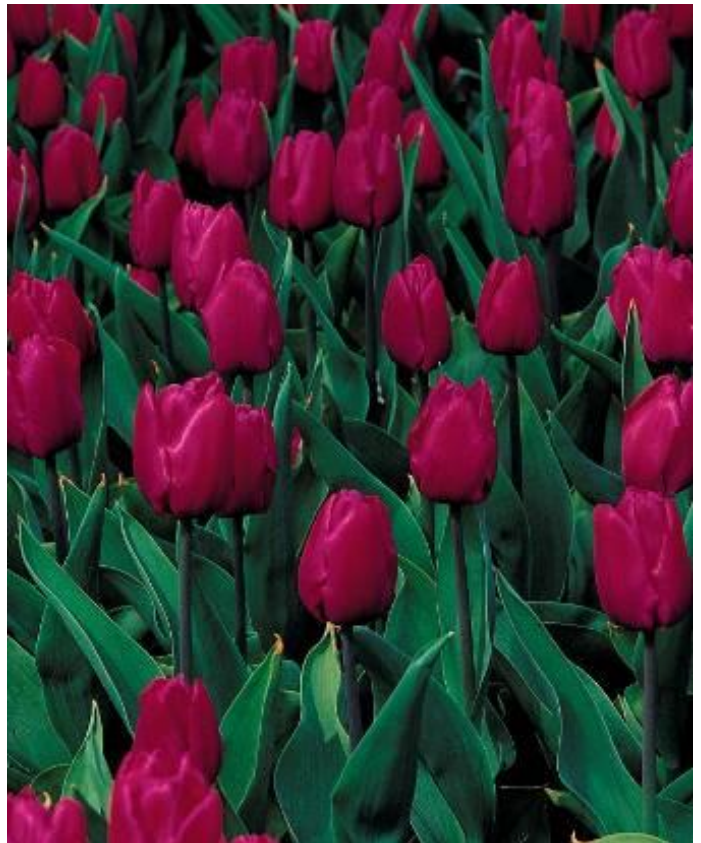
2010年の「ジャパン・フラワー・バルブ・オブ・ザ・イヤー」(JFBY)はチューリップ「パープルプリンス」に決定しました。



IBC オランダ国際球根協会では、毎年新たな球根品種の楽しみ方をご提案するため、毎年お薦めの球根花を一種類選出する「フラワーバルブ・オブ・ザ・イヤー賞」(Flower Bulb of the Year 略称：FBY) を6カ国対象に選定しています。国ごとに選定される品種が違っているのが面白い。賞はガーデン関連のジャーナリストなど専門家によるメンバーが責任を持って選んでいます。FBYは2000年から実施してきました。

FBY6カ国のうち、日本の市場動向やトレンドを考慮に入れ、選出したものを「ジャパン・フラワーバルブ・オブ・ザ・イヤー賞」(Japan Flower Bulb of the Year 略称：JFBY) と呼びます。この過去9回がチューリップで、09年は他の花と相性の良いムスカリが選出。今年の「パープルプリンス」は、人気の高いチューリップの中からこの秋冬のヨーロッパの流行色がパープルだったことなどの理由で選ばれました。

過去の実賞品種などは、下記のサイトで見ることができます。「パープルプリンス」を今年の実賞としてお勧めしたり、「フラワーバルブ・オブ・ザ・イヤーセレクション」として過去の実賞品種を集めてみるのも面白いかもしれません。



<http://www.prod.bulbsonline.org/ibc/nl/professional/inspiration.jsf/Inspiratie/bloembol-van-het-jaar1/2000-2007.html>

新たなチューリップ野生品種発見（画像は、17世紀のチューリップ・バブルのころの品種）

オランダの古い大学町であるライデンの植物研究者 ベン ゾンネフェルト氏は、チューリップの新しい野生品種をあらたに発見したと発表しました。氏によれば、世界中に少なくとも 87 種は野生品種が存在するとか。今までにない新しい発見となりました。

調査方法はチューリップの DNA 数を測定して行われ、その類縁関係を見極めるというもの。外見は似ていても、個々の DNA 数から実は別種ということが証明されるそうです。

また ゾンネフェルト氏は、チューリップがトルコ原産であるという説にも言及しています。

実際にはチューリップ野生品種は中央アジアで発見されていて、最初の球根が開花した場所についても、さらに研究が必要であると述べています。ゾンネフェルト氏は、研究調査のため、ヨーロッパとアジアの各地から 400 種類以上もの野生品種を採集したそうです。

ライデンはもともとチューリップとの縁が深い町。オランダでは 1594 年、ライデンの植物園で初めて開花したという記録が残っています。発見者カルロス・クルシウスの手によって植えられたとのこと。ゾンネフェルト氏の研究もライデンの国立植物標本館で進められています。



定番 切り花チューリップ ～スウェーデンとポーランド事情～ Bloembollen Visie から



オランダの切り花チューリップは、スウェーデンとポーランドでも依然として人気の定番アイテムですが、今回は両国の事情をさらに詳しくご紹介します。



まず、赤と黄色が一番人気の色。花のタイプはシングルが定番です。両国ではフラワーショップ、小売店でも最も好まれる花として定着しています。

2008 年の秋に、両国の小売店向けに電話アンケートが行われました。



スウェーデンでは、チューリップの需要は一般的に大きいのですが、ポーランドでは、まだ店主、オーナーの趣向に左右されているようです。それでもチューリップによる売り上げは大きく、約 20% を占めるという答えでした。



スウェーデンでは、チューリップは自家用と贈答用と半分半分の割合ですが、ポーランドでは、主に贈答用に購入されているようです。また、チューリップだけの単品使用、モノブーケとして扱われることが大半で、ミックスブーケやアレンジ使いを上回っています。チューリップは品種も多種多様ですが、シングル品種がやはり好まれる。一方、スウェーデンではダブル品種の需要もややあるのですが、ユリ咲きやフリンジタイプは非常に少ない。

電話アンケートでは、小売店とスーパーマーケットの競合事情についても質問しています。スウェーデンの花専門小売店では、約 60%がスーパーとの競合を切実に感じている。それに対してポーランドではスーパーの台頭はまだのようした。

仕入れの際の着眼点でも両国でやや違いが見られます。スウェーデンではクオリティー=品質が重視され、ポーランドではフレッシュ=鮮度が重視されています。色別では、スウェーデンでは赤、黄色、白が好まれ、ポーランドでは黄色、赤という具合。ただ、どちらの国でも原産国に気を使う点では同じです。

さらに、チューリップのブーケアレンジ応用については両国ともポジティブな反応。春を代表する「明るい雰囲気」の花というイメージは大きいですが、アンケートに答えた 3 / 4 の小売店によると、チューリップは「トレンドイ」でもあるということです。また品種の多様さについても、新品種の紹介が多すぎるといったことはない、と、これもまた将来の展開が期待されているようです。

ポーランドとスウェーデンでは、豊富な品種ラインナップをそろえるオランダ産切り花チューリップは非常に人気があるようです。オランダの輸出関係者は、品種の多様性と改良という点に留意する必要があります。特にスーパーマーケットとの競合対策に追われるスウェーデンでは花持ちが重要ポイントになります。

2010 年 チューリップ品種テストスタート Vakblad から

オランダの園芸評議会 (PT) の球根部会では、来年 2010 年にチューリップ 10 品種について、球根生産、花生産、卸業、そして消費者の各段階におけるテストを行う事を計画し、そのための予算 9 万ユーロを決定したと発表しました。

これらは、新品種だけに特性については未知の部分が多いのです。切り花生産者にとっては、開花期、休眠期間、そしてステムの重さなどが知りたいポイントであり、球根生産者にとっては、増殖や耐病性などが、そして業者や消費者にとっては、花持ちや輸出後の状態などが重要なポイントとなります。



チューリップ調査会は、毎年対象となった品種の見直し、ノウハウやデーターの管理を行っていきます。調査のプロセスが品種の選別に活用され、特性や品質向上につながり、または各段階の相互関係がより改善されることを目的としています。

このチューリップ品種テストは2010年から2013年にかけて行われ、テスト続行の見直しは毎年行われるとのこと。

チューリップ エクスカーション： チューリップ視察旅行



10月末に北オランダ州で、オランダ唯一のチューリップエクスカーション（視察旅行）が行われました。この試みは2009年1月に、チューリップ生産者ミュンスター氏の提唱で、チューリップの生産者としては初めて、外国からの視察者に温室を案内するものとして始められました。

各旅行会社やバス会社からの反響も良く、地元の様々な協力も得て1日周遊視察旅行プランができた。今年2009年はクリスマスから2010年の5月第1週までの期間で開催されます。



蒸気機関車、幌馬車のミニトリップや、各種博物館、地元市場への入場との組み合わせや、2010年2月24～28日開催のズバーフダイク市の「ホランド フラワーフェスティバル」や3月4～8日開催のプレーザンド市のレンテタウン（スプリングガーデンの意）ショーといったフラワーショーとのコンビパッケージも可能。



このチューリップ視察旅行は20～50人のグループで事前予約申し込みが必要。個人参加は特別の期日が設定されているとのこと。詳しい内容は<http://www.tulpenexcursie.nl/> をご覧下さい。

特に、前述のミュンスター夫妻の温室では、週6日、5カ国語の説明付きで、国内外からの視察者に特別最新のチューリップ品種を公開。同施設では、1シーズン通して700万本以上のチューリップを生産しています。



「人権チューリップ」 オランダの話題 鈴木のリ子さんのブログ「かえるの国の花便り」から



さまざまなプロモーションにチューリップの球根が使われているようです。オランダの鈴木のリ子さんが、街頭で配られた「人権チューリップ」の広報について取り上げています。人権保護団体の広報に使われたチューリップの球根はパッケージも明るく手に取りたくなるデザイン。その上、ちゃんと植え方まで図解されています。こんなところまで、やっぱりオランダらしいと思わせる記事です。

<http://blog.goo.ne.jp/tagamo-tamago/e/c9d0d5dca15cbcd2a39c9ab2957a0c70>

切り花チューリップのディスプレイ : IFEX の展示から

IFEX2009 の会場でのディスプレイの例。

グリーンウイングスジャパン社の展示はオランダのマスターフローリストである、アストリード ファン デンベルクさんがデザインしています。アストリードさんは、オランダ、キューケンホフ公園内の展示館でさまざまな球根植物のディスプレイをされているスペシャリストです。

ここ数年はガラス器に自然素材を無造作に合わせたスタイルをよく見せてくれています。今年は、このスタイルに、「ナチュラル」をテーマとしていて、縛るひもが毛糸素材などに変わりました。



展示は商品を品種ごとにを見せていくのが目的。一品種ごとに束ねて見せています。その時に大きな葉でまくと、花が色の固まりに見え柔らかい茎を支えるカバーにもなります。チューリップの特長であるきれいに伸びる花の茎もよく見せながら、ばらばらにならずにすてきですよ。今回は、はらんを何枚か使って、チューリップの束をまとめました。ここでも花を束ねるのは毛糸素材のひもを使っています。店頭やご家庭でも、ぜひこのテクニックを使ってみてください。

ほんとうにあっという間に年末ですね。今年は、園芸では野菜づくりが注目されました。消費のトレンドは昭和の「家族消費」から平成にかけての「ブランド消費」という流れがありました。それが、ここへきて、「手ごたえ消費」というものになってきているそうです。その説で行くと、球根は、気軽に花を楽しめるまさに手ごたえのある面白さで人を魅きつけていますね。次号は今年最後の号になります。中旬の発行です。お楽しみに。

オランダ国際球根協会ニュースレター第 008 号 発行：オランダ国際球根協会
HP : <http://www.kyukon.org/> メールアドレス : ibc@aurorajp.com